

称された。

その常楽寺に伝わった本親鸞像は、袂背別紙の康正二年（一四五六）の年紀を持つ修理銘によれば、文和三年（一二三四）に存覚が命じて大法師淨耀に描かせ、賛文を書して、常楽台御影殿に安置したという。寺伝では、存覚が夢の中で見た親鸞の姿を表わしたと伝え、「夢想感得の御影」とも呼ばれる。

作者淨耀は、中世真宗関係の絵画制作に広く関わった、常楽寺派の画家と見られる。「常楽寺後胤」との記述から、永仁三年（一二九五）に制作された最初の親鸞伝絵（初稿本）の絵師で、常楽寺と号したという淨耀の血統に連なると考えてよいであろう。他の事績は知られず、現存作例は本作のみである。親鸞画像にしばしば見られる鼻と頬の間に刻まれる皺の表現や、衣服の描写などには、幾分形式化した点が認められるものの、描線そのものは鋭く伸びて力強く、画技の高さを見せている。

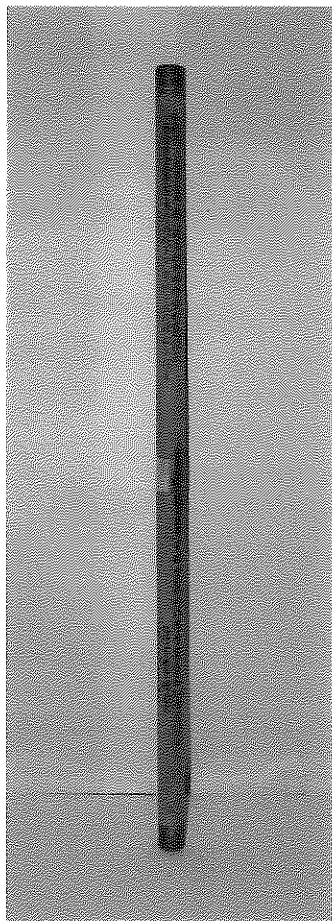
椅子の木部の側面と正面を並列して描く手法は、例えば一四世紀前半の制作とされる奈良国立博物館所蔵『明空法師像』など、鎌倉末から南北朝期にかけての真宗祖師像に共通して見られるものである。また、画面の周囲に枠を描いて区画し画面上部の中央に色紙型を配して賛文を墨書するのも、例えば奈良県順照寺所蔵聖徳太子ならびに和朝先徳連坐図など、中世真宗絵画にしばしば見られる。その場合、色紙型の周囲には描表装風の蓮華唐草文様を描くのが通例であり、本図の賛文両脇の失われた部分にも、当初は装飾が施されていた可能性が高い。

通常親鸞の肖像は、数珠を手に持って斜めを向く姿で描かれるのに対し、本図は、正面を向いて合掌し、背屏を持った椅子の上に坐す姿で親鸞を描いている点に特徴がある。鎌倉末期に建立された大谷廟堂に最初に安置された親鸞の木像が、やはり正面向きに坐して合掌する姿であったと考えられており、図像的には本図もその系統に属する。同様の図像は、永仁年間に制作されたと考えられる三重県修善寺所蔵『善信聖人親鸞伝絵』にあるように、親鸞の伝記絵における大谷廟堂の親鸞像描写には見られるが、単独の画像としては、本作とその写しが見られるのみである。

このように本作は、作者・年代の判明する数少ない南北朝期の絵画作品として価値が高いだけでなく、親鸞の肖像画の中でも特異な形式を示しており、極めて貴重なものである。

なお、近年の修理に際して、軸木から銘文が発見された。それによれば、寛文七年（一六七七）の修理の際に、親鸞の遺骨を軸木に納め、宝永三年（一七〇六）にその遺骨を取り出して宝塔に移したという。近世における本願寺教団の信仰形態を示す貴重な資料であり、旧軸木は附として併せて保存を図るものである。

（筒井忠仁）



旧軸木



絹本著色親鸞聖人像

木造阿弥陀如来立像

像内に文暦二年二月卅日、願主僧行範、泉州別当定慶造等の銘がある

八幡市美濃山大塚二
宗教法人宝寿院（山城郷土資料館寄託）

一 軀（彫刻・指定）

法 量 像高 七七・八 髮際高 七二・〇

頂ノ類 一三・〇 面長 一三・〇

面幅 八・二 耳張 一〇・五

面奥 一〇・一 肘張 二三・九

胸奥 一二・〇 腹奥 一二・〇

裾張 一七・二 足先開 一二・〇

（単位・センチメートル）

形 状 螺髮旋毛形（右旋）。肉髻珠・白毫相を表わす。玉眼。耳朶環

状。三道彫出。內衣・覆肩衣・衲衣・裙を着ける。左胸から腹

上にかけて內衣を表わす。衲衣は左肩から右前膊に懸かり、背

面から右腋下を通って正面に回り、衣端をふたたび左肩に懸け

て背面に垂らし、左肩で大きく折り返す。左胸から腹にかけて

衲衣下層の縁を上層の縁に懸ける。覆肩衣は背面から右肩に懸

かり右腕を覆い、衣端を右腹前で衲衣に挟み込んでたるませる。

裙は背面左寄り右前に打ち合わせる。左手垂下して第一・二

指を捻じる。右手屈臂し、掌を正面に向けて第一・二指を捻じ

る。右足をやや前方に出して前傾姿勢にて立つ。

品質構造 ヒノキ。寄木造。漆箔・金泥塗り。玉眼嵌入。肉髻珠・白毫相

は各水晶嵌入。頭体幹部は両耳後で前後二材を寄せ、内割を施

す。頭体部を正面材は胸部襟際で背面材は頸部襟際で割削ぐ。

足元は、正・背面材とも裙と衲衣の裾の境で割削ぐ。背面裙裾

を削ぐ。面部正面材は髮際やや上に、面部背面材はうなじにい

ずれも水平方向の矧ぎ目があり、頭髪部を別材から作る。頭髪

部は前後二材製で、前半材は下端に柄を作り出して、幹部背面

保存状況

材頸部の溝状の窪みに嵌める。左右揉み上げ、髮際中央地髪は別材貼り付け。後頭部中央に矩形の孔を穿ち、左右側面及び奥の面に半ばの高さで水平方向に溝を彫って紐を廻らした別材を嵌める。像内面部右耳裏辺に紐の根元が残る。左側外側部は袖下端まで一材。体幹部との間に薄い材を挟む。袖内側一重目、二重目をそれぞれ矧ぐ。右肩外側部は肩より内袖を含む上膊内側、外袖を含む上膊外側をそれぞれ矧ぐ。左足柄は前半材より、右足は前後材よりそれぞれ作り出す。頭髪表面は群青、他の表面は錆漆下地で、肉身は白下地に丹地金泥塗り、衣部は漆箔。面部に布張りが認められる。

肉髻珠、右揉み上げ、右上膊内側（袖を含む）、左側面裙裾、左胸から腹にかけての衲衣の下層の縁、両手首から先、両足の柄の上から先、面部及び肉身の金泥は一部後補。玉眼補修。

台座・光背は近世の後補。

時代 文暦二年（一二三五） 鎌倉時代

記録（像内体部正面墨書）

「阿弥仏御躰也」

（像内体部背面墨書）

「奉造立阿弥陀如来像

右為志者一切衆生成仏也致向後破壊

見及人奉加修鋪可令遂一仏浄土素懷給也

文暦二年歲次乙未二月卅日癸巳時正第二日始之願主僧行範泉

州別当定慶造也」

宝寿院は、明治三六年に創立された寺院で、第二次大戦以前の号を宝寿庵と言った。大正一四年に記された縁起によれば、戸津の無量院（廃寺）の檀信徒達が故あって美濃山に移り、正法寺の末寺であった宝寿庵の庵号をもらい受け、そこに以前からあった古い小堂を寺として復興したが、宝寿庵の興りであるという。宝寿院の什宝物は、多くが無量院檀信徒の寄進によるも

ので、本像も元は無量院、または、無量院住職の兼務する浄音寺に伝来したものであったと伝えられる。

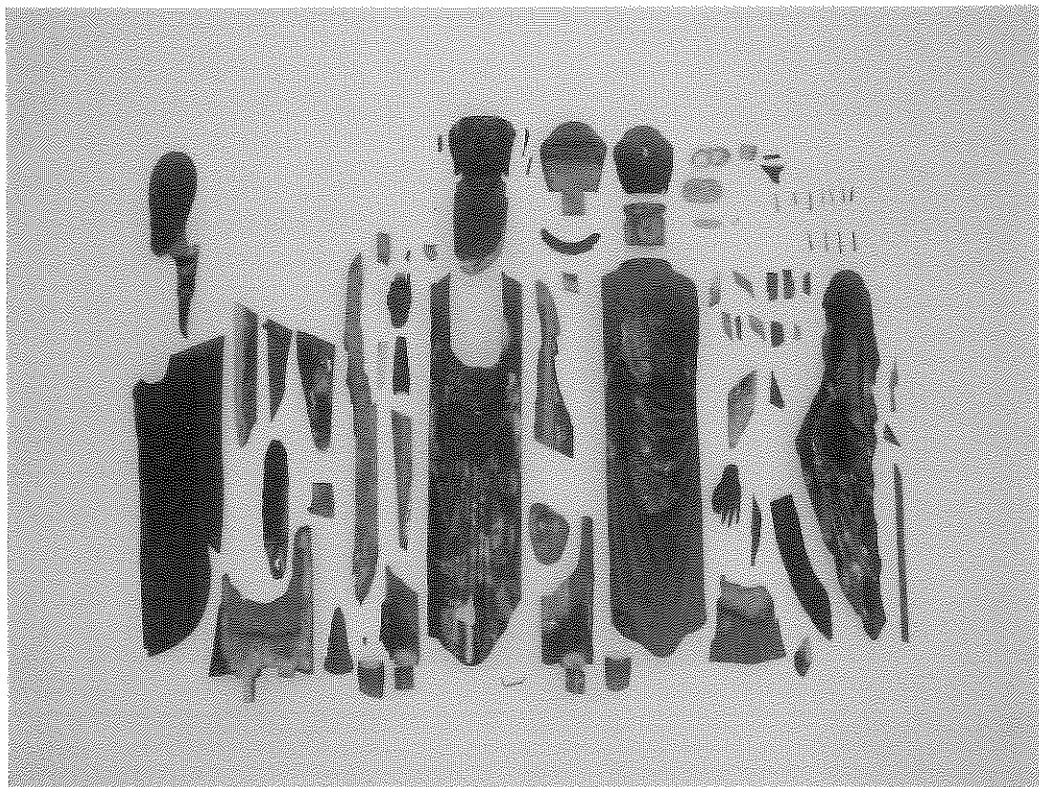
本像は、快慶の確立した安阿弥様の様式を受け継ぐ阿弥陀如来立像で、目尻を釣り上げて口元を引き締めた理知的な表情や、肉身に沿って起伏する整った衣文表現などが特徴である。ただし、安阿弥様の阿弥陀如来立像が、概ね像高三尺を測るのに対し、本作は二尺五寸とやや小振りである。複雑な衲衣の表現には、特に快慶晩年の特徴を見ることができ、快慶の没年の下限は嘉禄三年（一二二七）とされ、晩年の様式を受け継ぐ本像は、像内の墨書銘にある文暦二年（一二三五）の制作として、様式上も矛盾がない。

技法上、襟に沿って割首わりくびがなされている点や裾部以下を別材で制作して根幹部に差し込んでいる点などが注目される。在銘作品中、前者は、承久三年（一二二一）三重県久昌寺阿弥陀如来像が初例、後者は、天福二年（一二三四）奈良県金光寺阿弥陀如来像が最初とされる。両技法とも一三世紀の早い時期に確立したと考えられており、本像は両技法を採用した初期の作例といえる。こうした仕様は、多くの結縁者の関与する納入品を入れるためのものと考えられており、本像にも当初は、造立趣旨などを記した像内納入品があったと推測される。また、面部と頭髪部を別材とする点や、後頭部に紐を廻らした矩形の別材を嵌める点など、他に例を見ない特徴も看取される。同時期には、文暦二年（一二三五）の京都市北区清水寺阿弥陀如来立像に後頭部のみを別材で水平方向に矧ぐ例があるが、頭髪部全てを別材とする例は他に見当たらない。

本像の作者は、像内墨書銘から泉州別当定慶と判明する。作風や名前からして慶派の仏師と考えられよう。定慶を名乗る人物はこれまで三人確認されているが、泉州別当を名乗る定慶は他になく、作風も大きく異なるため、四人目の存在かと目される。本作は、泉州別当定慶の現在知られている唯一の現存作となる。銘文には願主として行範の名前が挙がるが、鎌倉期に行範と名乗る僧侶は複数確認され、今のところ特定することはできない。

このように本作は、鎌倉中期の阿弥陀如来立像の優品と言うだけでなく、制作年代及び仏師が判明する貴重な作例である。また、技法上の特徴も備え

ており、同時期の仏像彫刻史を考える上で欠かすことのできない作品として極めて価値が高い。



解体写真

（筒井忠仁）



木造阿弥陀如来立像